

## 紙つて

言葉の達人井上ひさしは「母語は道具ではない。精神そのものである」と言う。読みやすく、書き易く、正確で、潤いがある言葉を見つけなければならぬ。日本語も心もとない身には、外国語の習得は至難だ。

自然科学や技術の論文の九割以上は英語。少なくとも今世紀中は、科学の共通語は英語だろう。科学者には情報収集、論文執筆、他国の研究者と会話する能力が必要だ。アジア諸国の高等教育が英語化することを見て、若者にはできるだけ早く英語に慣れることを薦めたい。

しかし、科学者の評価を決めるのはあくまで研究能力と実績。英語の巧拙ではない。国際交流が乏しかった時代だが、一九八一年ノーベル化学賞受賞者

## 科学者の英語力 野依 良治

福井謙一博士の口癖は「英語の流ちょうなヤツにろくな科学者はおらん」。研究が卓越、魅力があれば、とつとつと話しても相手は必死に耳を傾ける。

英語国民なら良い論文が書けるのではない。われわれが受けた文法中心の英語教育は評判が悪いが、論文作成には一定の効果があつた。海外で認められるに

は、心を開いて思想や哲学、価値観、生き様を伝えることも大切。酒や食事がこれを助ける。趣味やスポーツも触媒となる。

今や国際的な会合では、非英米人が多数派だ。公用語はブローキングリッシュ(不完全英語)もしくはグロービッシュ(全世界語として通じる英語)。若者はおそれることはない。自らの個性を表現しつつ、さまざまな国の仲間たちと絆を深めてほしい。

(理化学研究所理事長)